

■ ザ・シンポジウムみなと in 小樽

令和元年11月27日(水)に27回目となる「ザ・シンポジウムみなと」が『開基150周年・開港120周年～船客万来・小樽港が目指す機能的な港湾～』をテーマに、小樽市の小樽市民センターマリンホールにおいて約400名が参加して開催されました。

はじめに主催者を代表して「ザ・シンポジウムみなと実行委員会」の笹島隆彦委員長が開会挨拶を行い、迫俊哉小樽市長から開催地代表としてご挨拶をいただきました。

次に、小樽市総合博物館の石川直章館長から『近代化を運んだ港』と題して基調講演をいただきました。講演では戦前までの小樽港の歴史を振り返り、小樽港は古くは縄文時代から交易の拠点として利用が行われ、明治期以降は幌内炭鉱からの石炭を本州方面に移出し、日本の近代化に重要な役割を果たした。さらに、小樽港を中心に金融機関、各種企業や工場が進出して、北海道の発展にも貢献したと紹介しました。また、小樽港の建設に携わった廣井勇博士は優れた技術者で、「小樽港は港の近代化を進めた」とともに、多くの優れた土木技術者を輩出したと讃えました。最後に、日本の近代化の百年を支えた小樽港は、次の百年、何を担うのかが重要と説きました。

続いて、「未来の小樽港～多様な機能に効率的に対応する港湾を目指して!」をテーマに、パネルディスカッションが行われました。小樽商科大学の李濟民教授をコーディネーターとし、小樽市 迫俊哉市長、北海商科大学 田村享教授、北海道港運協会 大田秀樹小樽支部長、商船三井客船(株)営業グループ 富田瑞穂課長代理、小樽商工会議所女性会 小笠原真結美副会長がパネリストとして登壇しました。冒頭、迫市長から小樽港の特徴、現状と課題について説明があり、続いて各パネリストの立場から小樽港に対する印象、港での取り組み、小樽港に求める機能、小樽港の目指す姿について発言があり、「港湾機能のすみ分けと老朽化対策が重要」、「クルーズ船の乗船客の待機スペースが必要」、「3号ふ頭等について早急な整備コンセプトの策定が必要」、「港の活用について小樽港から新しい流れを」などの貴重なご意見が出されました。また、迫市長から「3年ぶりに小樽港長期構想の検討を再開した。各種機能を適切に配置し、広域的・機能的な港湾のあり方を議論したい」との発言がありました。

基調講演、パネルディスカッションについては「海と港」第38号に掲載予定です。



開催挨拶
笹島実行委員長



開催地代表挨拶
迫小樽市長



基調講演
小樽市総合博物館 石川館長



パネルディスカッションの様子